

「茗荷谷の猫」 木内昇 著 文藝春秋 2011 年 9 月発行

理系の道を突き進む高専生の皆さん。何を隠そう、私も元理系です。ところが一転、大学入試も目前に迫ろうという 18 歳の 12 月、この作品と出会い、文転を決断、先生・友人・家族の反対もよそに、遂には大学で言語学を選択するまでに至りました。そんな私の宝物の一冊を、ぜひ紹介させてください。

先に、ひとつ。この小説の主人公は猫ではありません。(タイトルに惹かれて私の紹介文を読んできた、猫好きの方。どうぞ最後までお付き合いください。)

本作は単話の短編集形式をとっています。

主人公は、どの話も「人」です。各々の時代を生き、そして名残惜しくもあっさりと退場していく、不思議も特別もない等身大の人、人々。彼らの名は残らずとも、彼らの何かが、後の時代のどこかに確かに息づいている。永遠ではない私たちの命が、永遠に移ろう世界の中で、間違いなく生きていた…

丁寧な綴りと、厚みと軽さの巧みな構造に引き込まれる、静かな読了感が魅力です。

著者は哲学科心理学専攻のご卒業。簡素に見えて技の盛り込まれた文章は、この経歴からきているのかもしれませんが。

さて、なるべく小説の詳しい内容には触れずにまいりましたが、そろそろお別れとなりますので、私の人生を変えた一文を抜粋します。

_____佳代子の中で、何かが爆ぜた。

受験勉強のさなか、旧センター試験で扱われた本作を、過去問として怠惰に読んだ私の胸を打った一文です。授業中にも関わらず問題冊子を繰る手が止まり、すっかり時間を忘れて、解答もそぞろに余韻に浸ったことを覚えています。

生きることに不器用だった十代の私を新たな進路へいざなってくれた、茗荷谷の猫。もし良ければ皆さんも、会いに行ってみてください。